

『水経注疏』 関係檔案と同書稿本

池田 雄一

二〇〇九年三月九日から三月一二日の三泊四日で、台北市の中央研究院歴史語言研究所と国家図書館とにおいて『楊熊合撰水経注疏』（台湾中華書局、一九七二）に關係する諸資料の調査を行った。この間の調査には、東洋文庫東アジア研究部門中国古代地域史研究班のメンバー四名（研究員の多田狷介と小生、研究協力者の石黒ひさ子・山元貴尚）が同行した。

三月一〇日は国家図書館善本室を訪問し、『水経注疏』稿本のマイクロフィルムで必要箇所を複写し、翌一日の午前九時三〇分には、中央研究院歴史語言研究所の王汎森所長を訪問した。この日は、午後にかけて歴史語言研究所附設傅斯年図書館所蔵の『水経注疏』關係の檔案を閲覧した。東洋文庫から事前にお願ひしていた閲覧希望の檔案のコピーが準備されていて、全てに目を通すことができた。

傅斯年図書館を訪ねた翌日には、再び国家図書館善本書室を訪ね、台湾中華書局影印本の原本となった『水経注疏』稿本を実見することができた。

中国古代地域史研究班は、これまで『水経注疏』の訳注に取り組んできた（『水経注疏訳注（渭水篇 上）』東洋文庫、二〇〇八）が、その際、楊守敬・熊会貞の『楊熊合撰水経注疏』（台湾中華書局、一九七二）が重要な参考文献となった。ただこの楊守敬・熊会貞が生涯をかけた「疏」文の著述については、その刊行に至る数奇な経緯や、台湾中華書局刊『楊熊合撰水経注疏』が「疏」文の著述においてどの段階での成果であるか、等について確認すべき点が少なかつた。今回、閲覧が許された傅斯年図書館所蔵『水経注疏』関係檔案は、これら確認を必要とする諸事について貴重な情報を提示してくれると同時に、多様な『水経注』研究の歴史に新たな知見を提供してくれることになる。

この度、『水経注疏訳注（渭水篇 下）』を刊行するに当たり、中央研究院歴史語言研究所に、傅斯年図書館で閲覧した『水経注疏』関係檔案の収録を希望したところ、高配を得て、閲覧した関係檔案の全てを本書に収録することができた。併せて、巻頭に写真版を掲載することができた。中央研究院歴史語言研究所並びに傅斯年図書館の厚意に深謝申し上げる。

本書に収録する各檔案の紹介（別稿「傅斯年図書館所蔵『水経注疏』関係の檔案」）は、昨年、傅斯年図書館を訪問したメンバー四名が担当した。収録した各檔案は、「原文」と「注（語釈）」、それに「日本語訳」と「解説」とを付した。

本書に収録した檔案は、一九三八年七月二四日に、中央研究院が教育部による『水経注疏』稿本入手への同意を確認し、同年七月二八日に、楊家を代表する楊勉之から中央研究院歴史語言研究所所長傅斯年に稿本が手渡されて以降、一九四七年六月七日に印刷を引き受けていた商務印書館から教育部へ稿本が返還されるまでの約九年間に関わる。この

九年間は、中国においては、日中戦争から第二次大戦後の内戦の時期に当たる。このことから、楊家から傅斯年に手渡された『水経注疏』稿本も、この時代の激動と軌を一にした。

一九七一年六月に台湾中華書局で刊本として公となった後も、それに先行する同一著者の手になる北京の科学出版社版『水経注疏』（一九五七年二月刊）が存在したこともあり、台湾中華書局刊本『楊熊合撰水経注疏』については、なお多くの謎が残されたままになってきた。

昨年、傅斯年図書館を訪ねた翌日、台北市内の国家図書館善本書室で、『水経注疏』稿本を実見した。稿本は、冴えた銀朱の罫線が格子状に引かれ、墨書されていた。稿本の諸処には訂正、補正のために切り貼りが行われ、稿本の写真版として刊行されている台湾中華書局刊本では知ることのできない稿本作成の苦勞が、ひしひしと伝わった。

帰国後、傅斯年図書館で閲覧した関係檔案を検討する中で、幾つかの貴重な示唆を得ることができた。個別の檔案を検討いただければ、さらに多くの教示を得ることができるが、以下、取りあえずつぎの三点について略述しておく。

その三点とは、先ず第一に、楊家から傅斯年（一八九六～一九五〇）に渡った『水経注疏』稿本が、楊守敬の死後、熊会貞・李子魁に引き継がれた「疏」文編纂作業の最終稿であり、北京の科学出版社版よりもさらに「疏」文の編纂作業が進展した版本であったこと。第二は、中央研究院歴史語言研究所が入手した『水経注疏』稿本が、商務印書館で組版のために準備が進められていたこと。第三は、商務印書館が刊行を断念し、『水経注疏』稿本が、楊家への稿料の支払いに協力した教育部に返還されたこと、等である。

第一は、一九三八年七月二八日、武漢で楊守敬の孫楊勉之と勉之の子息楊世漢、それに湖北教育研究所の時昭瀛、閻（巖）実が立会いとなり（宜昌市・宜昌市政協文史資料委員会「楊守敬學術年譜」湖北人民出版社、二〇〇四）、傅斯年に『水経注疏』稿本が手渡された。この際の契約書（檔案Ⅱ参照、本稿で引用する檔案は別稿「傅斯年圖書館所藏『水経注疏』関係の檔案」所収の檔案番号で表記する。以下同じ）では、「体例、不得塗沫及更改」と内容に対して、新たに手を加えることが禁止されている。その理由の一つは、熊会貞による疏文補訂作業の後を、一九三七年夏秋に引き継いだ李子魁が行った「塗沫及更改」の事態がある。このため楊家としては、体力の限界を悟った熊会貞が、一九三四年秋に稿本を楊勉之に託した際の原形を保つことを願ったの配慮が必要であったと思われる。傅斯年が入手した稿本が、楊守敬・熊会貞による稿本の最終稿であったことを窺わせる。事実、稿本と最終段階まで関わった李子魁も、稿本が楊家から他に出ていないことを述懐している（「李子魁自述」、「楊守敬集」第三冊「集末附記」所収、湖南人民出版社、一九九七）。唐突にも受け取られかねない契約書中の一条であるが、その後、台湾中華書局刊本となった『楊熊合撰水経注疏』の位置付けを物語る。

国家図書館善本書室で実見した台湾中華書局影印本の原本である『水経注疏』稿本は、楊守敬・熊会貞の生気を感じさせる原稿であった。ただ『水経注疏』稿本を影印した台湾中華書局影印本は、北京の科学出版社影印本との間で、『疏』文に微妙な相違が存在する。熊会貞生前に抄録された科学出版社刊『水経注疏』は、その後も、熊会貞や李子魁等による補訂が加えられていた。このため『疏』文での相違は当然のことではあるが、それでも科学出版社刊『水経注疏』が、稿本から転写される際に、あるいは一定の配慮が加えられていなかったかもお慎重に検討すべき余地があ

る。

第二は、商務印書館に入稿後、『水経注疏』の刊行を進める上での困難さが、商務印書館から傅斯年に宛てた書翰で確認できる（檔案Ⅲ参照）。傅斯年図書館には巻頭第一頁の組版が残されている（檔案Ⅸ参照）。国家図書館善本書室所蔵の『水経注疏』稿本にも、活字印刷のために改行を指示した「提行」の文字や「レ」印が朱で書き込まれている。また稿本では、内容の確認作業が引用文献との照合を通じて進められ、校訂者のサイン「緯」（傅緯平）字等が記入されていた。ただ稿本は、香港の商務印書館に入稿されていたことは確認できるが、日中戦争が激化する中で、その所在さえもが確認し難くなっている。商務印書館内で出版に向けての作業が進展していたことは事実であるが、この作業が香港で行われていたのか、一九四一年に商務印書館総管理處が重慶に移転した後、稿本の整理作業も重慶に移されたのか等は未だ確認できない。

第三は、商務印書館から教育部への稿本の返還である。一九四七年六月七日のことで、この稿本は、後、一九四六年六月に南京で開館された国立中央図書館に保存された。以来、今日に至るまで、国立中央図書館が改称（一九九六年二月改称）された教育部管轄の国家図書館善本書室に所蔵されている。

この稿本が、教育部に返還された時期が確認できる傅斯年図書館の檔案は、教育部から発行された『水経注疏』稿本を一九四七年六月七日に受け取った旨の受領書（檔案Ⅴ参照）であって、同年六月一二日付けの商務印書館から歴史語言研究所宛の書翰（檔案Ⅵ参照）でも稿本が教育部に返還されたことが報告されている。歴史語言研究所が楊家から受

け取った稿本が、教育部に返還された事情は、楊家への稿料の分担が、歴史語言研究所一千元、教育部二千元と教育部の方が多額に上っていたことも関係しているかも知れない（檔案Ⅱ参照）。商務印書館の総管理處が重慶に移転した際、傅斯年は商務印書館の王雲五から一九四二年九月五日付けの書翰（傅斯年図書館所蔵「傅斯年圖書館所蔵檔案目錄」中に書翰内容の「摘出」を掲載）で稿本の「内地」（重慶）への移送について相談を受けている。この時、傅斯年は、教育部の陳立夫部長に、移送の如何を確認し、一九四三年一月二日付けで王雲五に対して傅斯年が、陳立夫からもし適当な人がいて内地に行く機会があれば稿本を託すように、と了解を得た旨を伝える書翰（傅斯年図書館所蔵「傅斯年圖書館所蔵檔案目錄」中に書翰内容の「摘出」を掲載）を出している。稿本の管理に教育部が深く関わっていたことが明らかとなる。

以上、傅斯年図書館所蔵『水経注疏』関係檔案について、幾点かを略記したが、最後に、教育部に『楊熊合撰水経注疏』稿本が返還された後の動静について簡単に付言しておく。

商務印書館に入稿された『水経注疏』稿本に対して、傅斯年以外に稿本と密接な関わりを持った人物に胡適（一九一〇―一九六〇）が存在する。胡適は、一九四七年三月二日の『胡適日記』に商務印書館から稿本を借覧し、その内容に対する評価を「不精細」と書き記している。胡適は、商務印書館の出版物に対して大きな影響力を持っていた。胡適が商務印書館から稿本を借り出し確認作業を行ったのは、商務印書館が刊行を本格化する上で胡適の判断を仰いだためと思われる。一九四七年六月七日に、商務印書館が『水経注疏』の刊行を断念し、教育部へ稿本の返還を行った背景には、この胡適の稿本に対する評価が影響していたと思われる。

胡適は、商務印書館で稿本を借覧した際、組版にせず、マイクロフィルムで各図書館に配置すれば良いとも主張している（記中央図書館蔵の楊守敬・熊会貞《水経注疏》鈔本四十卷）一九四八年一〇月記。『胡適全集』第一六卷所収、安徽教育出版社、二〇〇三）。確かに台北市の国家図書館には、マイクロフィルム化された『水経注疏』が架蔵されていた。台湾中華書局から影印本『水経注疏』が刊行されるには、胡適の死（一九六二年）後、九年を閲した。

勿論、胡適が『水経注疏』稿本を否定的にのみ捉えていたわけではない。北京大学で胡適の講義を受講した『楊守敬集』（湖南人民出版社、一九八八―一九九七）の編者謝承仁は、一九四八年の講義で、胡適が楊守敬の「手稿」を受講生に見せ、「寶貝、寶貝」と賞賛したと回顧し（重印『水経注疏』前言『楊守敬集』第三冊）、この楊守敬の「手稿」は、台湾で影印された稿本ではなかったかと推論している。『胡適日記』の一九四八年を確認してみると、一〇月二二日に、南京で六種の『水経注疏』を見たとき書き残しており、この中に楊守敬・熊会貞の『水経注疏』も含まれていた。北京大学で受講生に楊守敬の「手稿」を見せた月日が不明ではあるが、講義に持参した楊守敬の「手稿」は、一〇月下旬に南京の国立中央図書館から借りだした『水経注疏』稿本であった可能性も残る。

また李子魁が湖北師範学院から一九四七、八の两年に楊守敬・熊会貞『水経注疏』を刊行した際には、一九四八年九月に、南京の国立中央図書館に出向き、『水経注疏』稿本を確認している（記李子魁校補楊守敬・熊会貞《水経注疏》之偽）一九四八年一〇月記。『胡適全集』第一六卷所収）。一九四七年六月七日に教育部に返還された稿本が、翌年九月を遡る時点で国立中央図書館に移管されていたことになるが、湖北師範学院から楊守敬・熊会貞の『水経注疏』が刊行されると、

多忙の中、早速、南京の国立中央図書館に足を運んだ。

胡適の楊守敬・熊会貞『水経注疏』に対する関心の深さを窺わせる。李子魁は、熊会貞の死後、楊家で『疏』文の編集作業に関係を持った唯一の人物であるが、李子魁の『水経注疏』への関わりには問題が残った。胡適は、この湖北師範学院刊の『水経注疏』に対しても、一九四八年一〇月八日「半夜後」に記された国立中央図書館長蔣慰堂と国立編訳館長趙士卿宛の書翰（「記李子魁校補楊守敬・熊会貞『水経注疏』之偽」一九四八年一〇月記。「胡適全集」第一六卷所収。蔣慰堂・趙士卿については復旦大学李曉傑教授の教示を得た）で、「我看了一遍之後、心裏很懷疑」とその内容に疑問を呈し、楊熊合撰の『水経注疏』稿本とは全く異なる内容であることを認めた^{した}ている。

商務印書館での組版刊行には否定的見解を懐いた胡適ではあったが、『水経注疏』稿本に対する関心の高さは、商務印書館から教育部に稿本が返還された後も、引き継がれていたようである。

なお『水経注疏』稿本に関しては、汪辟疆「明清兩代整理水経注之総成績」（一九四〇年一月二九日『時報新報』幅刊『学燈』七〇期。一九七二年台湾中華書局刊『楊熊合撰水経注疏』所収）、同「楊守敬熊会貞伝」（『中国学報』第一卷第二期、一九四四。『汪辟疆文集』上海古籍出版社、一九八八）、同「熊会貞遺事」（一九四三年四月三日記。『汪辟疆文集』上海古籍出版社、一九八八）、賀昌羣「影印水経注疏的説明」（『水経注疏』科学出版社、一九五七）、陳橋駅「關於水経注疏定稿本の下落」（『麗学新論』山西人民出版社、一九九二）、鄒志群「水経注疏版本考」（『中国史研究』二〇〇二年第二期）、謝承仁「重印『水経注疏』前言」（『楊守敬集』第三冊、湖南人民出版社、一九九七）、王永瑞「集末附記」（『楊守敬集』第一三冊）、山元貴尚「『水経』、『水経注』、

『水経注疏』について」(中国古代地域史研究班『水経注疏訳注(渭水篇 上)』東洋文庫、二〇〇八)、拙稿「稿本の怪―『楊熊合撰水経注疏』稿本と傅斯年―」(『中国出土資料研究』第一三三号、二〇〇九)、等がある。

『水経注疏』稿本に關係する檔案が、傅斯年図書館に所蔵されていることは北海道大学の吉開將人氏から教示を得た。傅斯年図書館での檔案閲覽に際しては、歴史語言研究所王汎森所長(当時)、秘書室張秀芬氏並びに傅斯年図書館閲覽室の諸氏にお世話になった。国家図書館善本室での稿本閲覽に当たっては、漢学研究所耿立群組長、特蔵組編集の張圍東氏の厚意を得た。關係各位に感謝申し上げる。